東京都市大学共通教育部紀要　抜刷　2020 Vol.13

House Design of Chikatada Kurata(1):
The Construction Process and the History of Former Yonekawa House

蔵田周忠の住宅設計（1）
―旧米川正夫邸成立の経緯について

岡山 理香

Journal of Liberal Arts and Sciences at Tokyo City University Vol.13, 2020

蔵田周忠の住宅設計（1）
―旧米川正夫邸成立の経緯について

人文・社会科学系　人文・社会科学教育部門　岡山 理香

はじめに

蔵田周忠は、武蔵工業大学（現東京都市大学）建築学科で長年教鞭をとっていたが、建築事務所も構えてその実務にも当たっていた。蔵田は、郷里の山口から私立工手学校（現工学院大学）建築学科に入学し、卒業後、三橋四郎建築事務所の製図員となった。その後、曾禰中條建築事務所、関根（要太郎）事務所に勤務。製図員として銀行、ホール、学校といった中・大規模な建築にも携わっていた。向学心から働きながら早稲田大学理工学部建築学科選科生となった。分離派建築会にも所属していた。独立後、型而工房も結成され、住宅設計も多く手がけるようになった。

本稿では、蔵田が設計した40棟以上の住宅のうち、現存する1棟（旧米川正夫邸・現野田邸　以下、旧米川邸）について述べていきたい。旧米川邸については、2001年に菊地潤氏によって現存が確認されており、いくつかのレポートもある[1]が、不明な点も多かった。

このたび、2017年から2020年にかけて、施主であった米川正夫氏のご子息である米川哲夫東京大学名誉教授と現当主である野田澄子氏へのインタビューを行った。[2]大正期に誕生されたお二人に大変貴重なお話を伺うことができた。今後もお二人へのインタビューを予定しており、そのさいの資料ともなるようこれまでの調査研究をまとめておきたいと思う。

本稿で参照する旧米川邸の主な資料は、雑誌『建築画報』昭和3年（1928）4月号「米川正夫氏邸」[3]、同5月号、蔵田周忠「理解ある施主と工事の失敗　―米川氏住宅に就て―」[4]、東京都市大学蔵田周忠文庫所蔵の写真、米川正夫『鈍・根・才』[5]、米川哲夫「父の思い出　―書庫・トルストイ・

図１　旧米川邸　現野田邸
東京都杉並区　撮影：筆者　2020 年

図２　米川正夫邸　設計：蔵田周忠　1928 年　東京都市大学蔵田周忠文庫所蔵

邦楽」[6]、アレクサンドラ・トルスタヤ『お伽の国 - 日本　海を渡ったトルストイの娘』[7] である。現況に関しては、稿をあらためて報告することとする。インタビューによって得られた新たな知見も加えて、旧米川邸の概要、成立過程について述べていきたい。

1　旧米川邸の建築的特徴

旧米川正夫邸は、昭和３年（1928）東京府下・中高井戸（現東京都杉並区）に竣工した。所在地は、杉並区。JR 西荻窪駅からの住宅街に現存している（2020 年）。【図１】

施主は、米川正夫、設計は、蔵田周忠（1895-1966）である。敷地は、南北に長い矩形状で、北面と西面が接道する角地に建っている。主屋は、木造（一部鉄筋コンクリート造）２階建、南側に広い庭を持つ。【図２】

入り口は北西にあり、広い煉瓦敷のポーチから玄関扉にアプローチできる。このポーチにかけられた陸屋根を支える白い角柱に目がとまる。主屋には切妻屋根がかかっているが、西端に位置する書庫（鉄筋コンクリート造）の上部は、２階の露台（テラス）となっている。【図３】

主屋南面は、煉瓦敷のベランダがあり、平面に従ってそれぞれ開口部（出窓、円窓、掃き出し窓）がとられている。居間前にはパーゴラ（つる棚）が設けられている。切妻屋根の２階天井部分から水平に庇が出ているので、主屋南面は、写真の撮り方によっては、陸屋根、白壁のインターナショナル・スタイルの住宅のような印象を与える。【図４、５】

しかしながら、入り口付近からの米川邸外観の印象は、切妻屋根、白い角柱、白く仕上げられた妻面、煉瓦色のタイルなどによって、洋風の郊外住宅、田園風の住宅、といった趣である。現在、外壁は白色に塗られており、また、当時の写真は白黒のため、壁面は白色と判断してしまうのだが、蔵田は「外観はいくらかあづき色を帯びた『ロツクスタコ（ロックスタッコ：珪藻土の入った漆喰）』塗。勿論下地はフエルトを張つてメタルラスを張つてゐます。」と記している。外壁の色は、白に薄っすらと小豆色がかかっていたようである。屋根には「まんがん色の日本風の瓦」が葺かれ、「タイルは黄土色のスクラツチ（粗面）です。其他には色彩はたいしてありません。」[8]

図３　米川邸外観　西側　東京都市大学蔵田周忠文庫所蔵

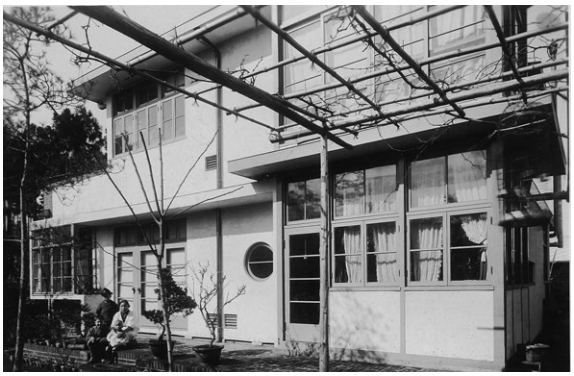

図４　米川邸外観　南側　東京都市大学蔵田周忠文庫所蔵

図５『建築画報』表紙　建築画報社　1928 年５月号　題字デザイン：蔵田周忠

蔵田は、同年に石川邸、翌年に勝野邸（中野区）を設計しているが、いずれも切妻屋根をもつ木造２階建で、外観、内観において、和洋さまざまなデザインが折衷されている。当時、流行していた文化住宅とは、また違った方法論でこうした郊外住宅を蔵田が設計していたことに注目したい。蔵田は、昭和５年（1930）から昭和６年（1931）にかけて渡欧し、ドイツ・ベルリンを中心としてヨーロッパ各地の建築を巡るのだが、その帰国後に設計した住宅は、はっきりとした特徴を持っていた。明らかに渡欧以前の折衷様式とは異なった「インターナショナル・スタイル（国際様式）」である。それは、昭和11年（1936）に完成した等々力ジートルンク（世田谷区）の４棟をはじめとした、陸屋根に白い壁、「豆腐のような」と形容された白い箱形の住宅デザイン。昭和の都市生活に合わせた住宅の有り方を模索していた。

旧米川邸の設計には、蔵田がヨーロッパ建築を実際に経験する以前において、新しい生活スタイルのためになされた工夫が各所に試みられていることを後述する。

竣工当時の主屋の住人は、米川夫妻と２人の息子、ロシアから連れ帰ったトーリャである。[9] 竣工当時の室名は、雑誌『建築画報』1928年（昭和３）5月号[10]に掲載された記事の平面図から確認される。【図６】１階は、玄関階段ホールを中心として南側の東端から「居間、食堂」「応接室」「書庫」が並び、北側は、東端から「台所」（その北奥側に「洗濯場」「浴室」）「脱衣所」「便所（大、小）」と水回りが配置されている。「便所（大、小）」は、く形の階段下に配置したため、天井高が足りず、床を１尺ほど下げている。「居間、食堂」と「応接室」の南側にベランダがあり、居間のガラスの嵌め込まれたドアから出られる。次に「玄関階段ホール」「居間、食堂」「応接室」「書斎」それぞれの特徴を述べていく。

（１）　玄関階段ホール

北側から地面より一段上がって煉瓦敷のポーチに入り、左手（西向き）に玄関扉がある。【図7】両開きであるが把手は、右扉のみ。扉上部に明かりとりのはめ殺しのガラス窓がある。木材で下部に金属板が鋲留めしてある。扉の左手壁にはスクラッチタイルが張られている。装飾のない直線的なデザイ

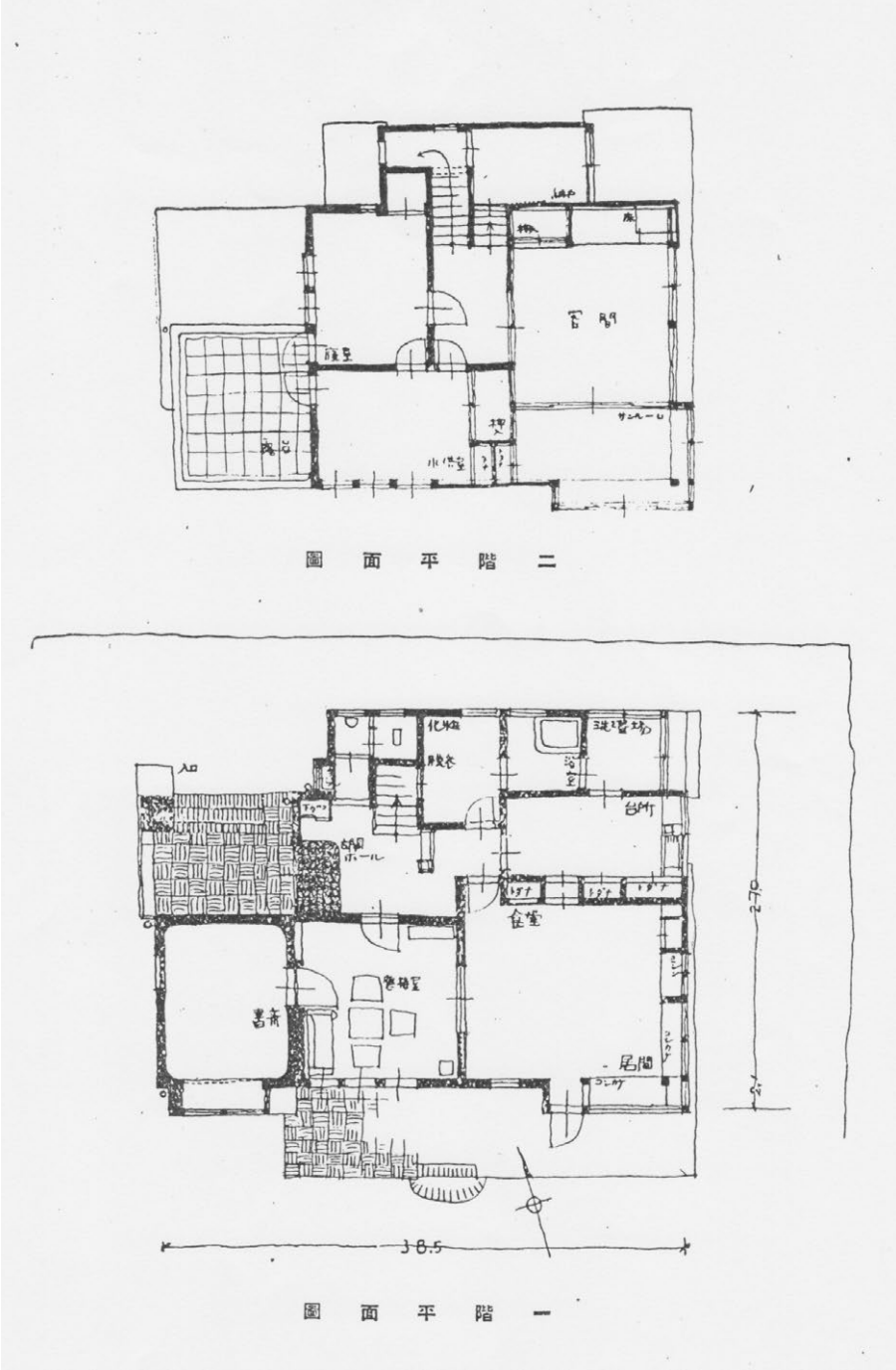

図６　米川邸図面
『建築画報』建築画報社 1928 年 5 月号

図７　旧米川邸　現野田邸　玄関　撮影：筆者　2020 年

ンであるが、木材、煉瓦、スクラッチタイルを使い、モダンで暖かみのある雰囲気が醸し出されている。外開きの玄関扉を入ると、板張りの玄関ホールがある。【図８】左手に二階へ上がる階段。その手前にある木製スクリーンの直線を組み合わせたシンプルで斬新なデザインは、とても美しい。天井から吊るされた照明器具は、鉄鎖と摺りガラスの立方体を組み合わせている。玄関床には、幾何学模様の茶色のタイルが張られている。階段手前、一段下がって手洗い、水洗便所（小・大）。ホール奥手には、台所へ続いているので、その前に衝立が置かれている。裏には、コート掛けと傘立てがある。手前には、長細い鏡が取り付けられている。出かける前の身嗜みを整える小さくて機能的な場所になっている。ホール右手に応接室に入るドアある。

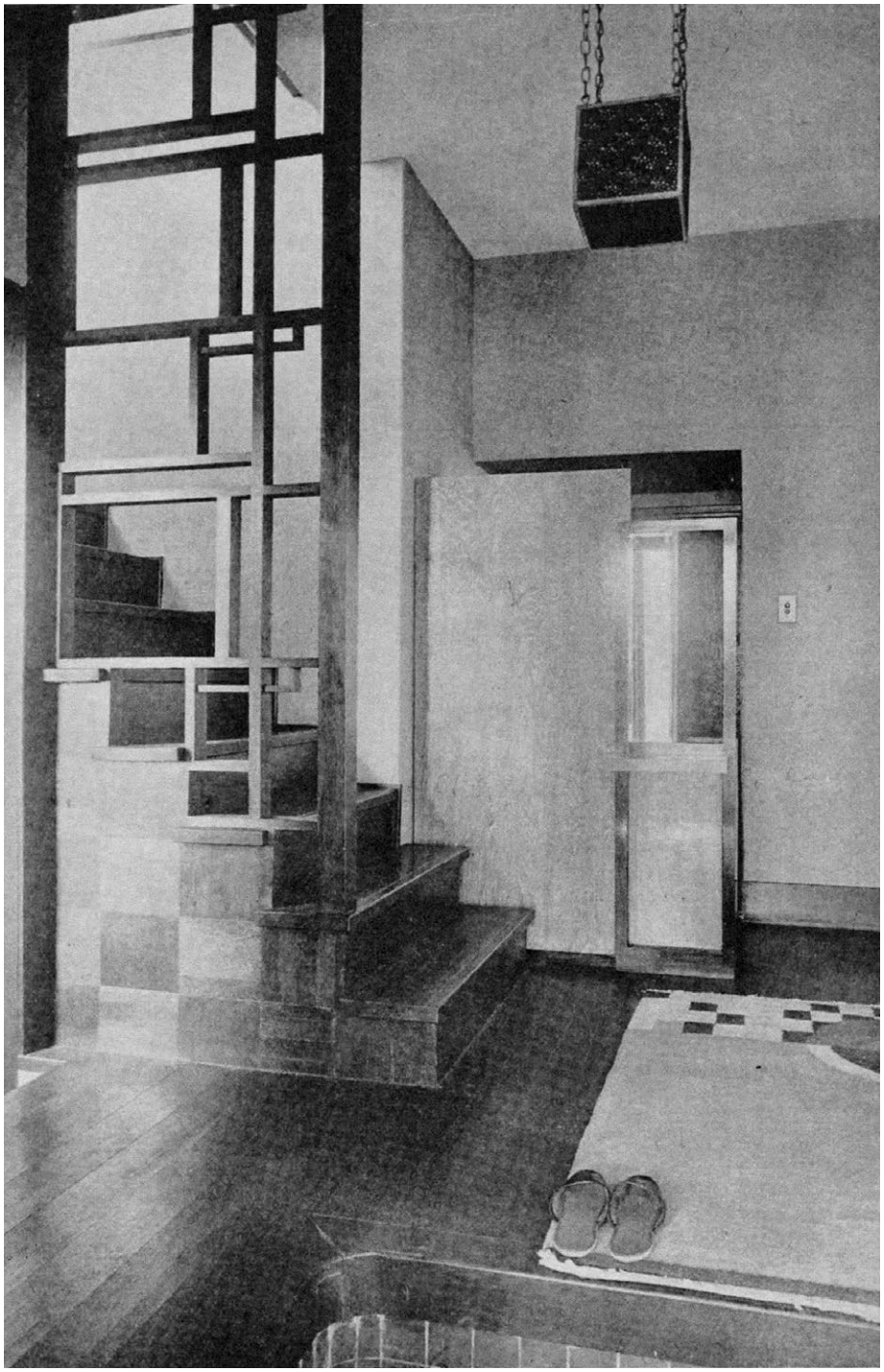

図８　米川邸内観　玄関ホール　『建築画報』建築画報社　1928 年 4 月号

（２）居間、食堂

１階で最も広い部屋が「居間、食堂」である。板張りの洋室で、南側が居間、北側が食堂となっている。それまでは、洋式を取り入れた大邸宅においては、居間と食堂が別室となっているプランが主流であった。椅子式の生活様式が普及するにつれ、このように居間と食堂が１室となるプランが取り入れるようになった。食堂は、北側の台所とハッチで繋がっている。この両面ハッチから料理が出されていた。[11] 長方形のテーブル、その周りに椅子が６脚（皮張りの鋲留め仕上げ）あり、ゴシック・リヴァイヴァル風のデザインとなっている。北面の壁に床から天井までの作り付けの木製収納棚がある。【図９】白壁に対し、木部は、「いくらか紅殻色」[12] の黒で色づけされており（台所へ続くドアも同系色）、腰高まで引き違いの木製扉のある棚、その上部に磨りガラスの引き違い戸の棚があり、食器類が収納されていた。こうした機能的で直線的なデザインは、リートフェルト「シュローダー邸」[13] やグロピウスの「マイスターハウス」[14] を想起させる。東面には、ミシン置き場が取られており（【図９】右下に足踏みミシンが写っている）ちょうど作業する目線に横長の窓が開いている。この窓に連続して東南角に天井から腰高までの窓が設けられている。このあたりから居間となる。【図 10】壁には「檗山路式布目壁紙の銀色」[15] が張られている。窓下には、L 字型に作りつけの「コシカケ」（木製の長椅子、皮張りの鋲留めは、食堂椅子の仕上げと同じ）。青い絨毯が敷かれている。この窓辺の「コシカケ」近くに煙突付きのストーブが置かれている。日当たりよく、暖かく居心地の良さそうなコーナーである。スコットランドの「イングル・ヌーク（暖炉の側にある腰掛け）」、それに起源を持つフランク・ロイド・ライトのウイリッツ邸など一連のプレーリー・ハウスに見られる「ヌック」をお手本にしている。南側「コシカケ」の端にガラスの嵌め込まれたドアがあり、ベランダへ出ることができる。煉瓦敷のベランダに出ると左手にパーゴラ（つる棚）がある。[16] さらに南壁面には、円窓がある。ステンドグラスこそ嵌め込まれていないが、ウィリアム・モリス「赤い家」の三連の円窓が思い浮かべられる。

図 9　米川邸内観　食堂　東京都市大学蔵田周忠文庫所蔵

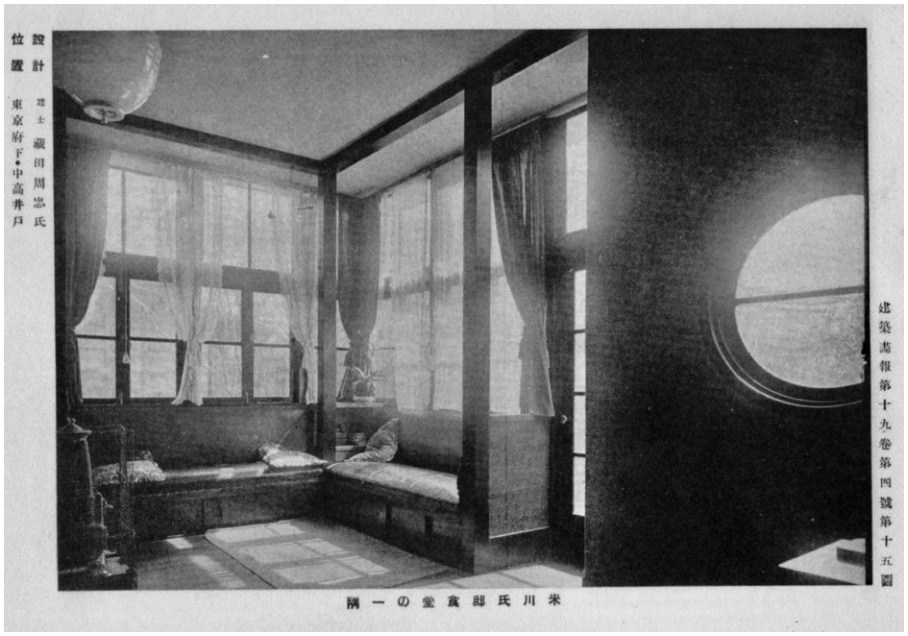

図 10　米川邸内観　居間　東京都市大学蔵田周忠文庫所蔵

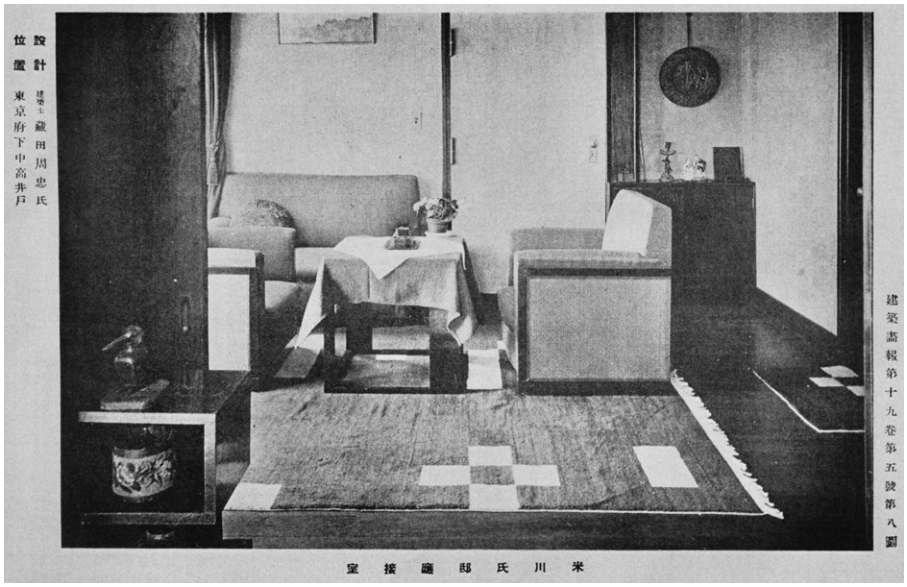

図 11　米川邸内観　応接室　『建築画報』建築画報社　1928 年 4 月号

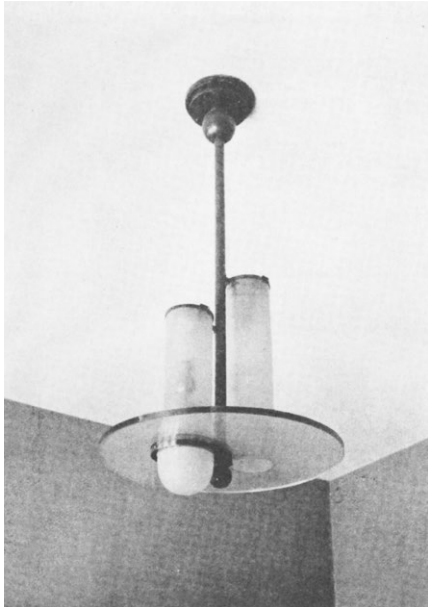

図 12
応接室　照明器具
『建築画報』建築画報社　1928 年 4 月号

図 13
応接室　本棚
『建築画報』建築画報社　1928 年 4 月号

（３）応接室、書斎

「居間、食堂」と「応接室」は、引き戸で繋がれている。【図 11】明治期における洋風式住宅では、客間と家族の居室は壁で隔てられる設計が主流であった。このように引き戸によって２室を連続させる設計は、新しい都市生活のスタイルを反映しているものである。客人のための応接室と家族の居室を連続させることによって、多くの客人を迎え入れられるといったようなさまざまな対応が可能となる。

壁には、居間と同じ「檗山路式布目壁紙の銀色」が張られている。「天井白。木部黒縁のワニス。家具の布白つぽい藍。敷物はエンヂと黄と白の絨緞。」と説明されている。[17] 応接室の照明器具【図12】は、ガラスの円盤に二本の円筒が刺さっており、当時としてはかなり斬新なデザインであったと思われる。デ・ステイル、バウハウスのデザインに強い影響を受けていることが窺える。どのように室内を照らしていたのであろうか。

応接室の調度として、平面図には、一人掛けソファー３基、二人掛けソファー１基、棚・大１基、小１基が配置されている。『建築画報』に掲載された画像には、一人掛けソファー2基、二人掛けソファー１基、棚・中１基、小１基が写っている。平面図にある棚・大（本棚）【図 13】であるが、これは、玄関ホールから入る扉の左手に配置されているため画像に写っていない。この棚・大は、現存している。[18] 楢材に黒く色付けされ、装飾のない直線的でシンプルなデザインであるが、ただの四角い箱ではないところに蔵田の造形力を見ることができる。本棚をシンプルで使いやすいというだけではない、造形としても魅力のあるデザインを模索していた。こうした姿勢を引き継いで型而工房も日本人の体型を考慮した使い勝手のよい家具の試作を繰り返した。

書斎は、唯一、鉄筋コンクリート造になっている。【図 14】書庫も兼ねており、大正12年（1923）の関東大震災の経験から頑強につくられた。ロシア文学者であった施主の貴重な資料（原書など）を火事などの災害から保護するためである。応接室に続く扉は鉄製である。「スティールドアは両面太鼓張のフラツシドアにして、之に壁紙を張りました。軟かい感じにしたかつたのです。」[19] 床には「フロアリングブロツク」を敷いた。また「南側の出窓に

はモザイクタイルを張つて色の変化をつけると共に、草花など置いて、少し重い感じの書斎のハイライト」[20]にするといった配慮もされている。この出窓は、スチール・サッシ、その手前には鉄のシャッターが取り付けられていた。[21]ここは、書庫として災害への万全の備えをし、書斎としても居心地よく使えるよう工夫した結果である。

以上のように、1階には、和室は無く[22]、客人のための応接室、家族のための居間、食堂も椅子座であるが、2階には「客間」として八畳の和室がある。床の間に、3月の節句には5段飾の雛人形を飾ってお祝いした。女の子の誕生を願う迎え雛であったという。[23]その和室の南側にある次の間（サンルーム）は、日当たりがよく、床にコルク材を敷いて、籐椅子を置くこととした。南東のL字型の出窓にもコルクを張って、縁側のような雰囲気がつくられた。北側に1段下がって納戸。西側に6畳の「寝室」、その南側に「小供室」が配置されている。両方の部屋から書斎の陸屋根となっている「露台（テラス）」に出ることができる。

図14　応接室　『建築画報』建築画報社　1928年4月号

この住宅設計に関して、「米川氏はその住宅に対する必要な要求だけを私（蔵田）に提出されただけで、後は一切私にまかせて下さつたのです。」[24] つまり、米川氏は、機能的な面に関していくつか要望を出したが、全体の構成や細部のインテリア・デザインについては、蔵田に一任したのである。

蔵田は、この住宅の設計に入る前の大正14年（1925）4月～昭和元年（1926）4月にかけて、10回にわたり「近代英國田園住宅抄」を『建築画報』に連載し、それに加筆し『近代英國田園住宅抄』[25] としてまとめている。その後、「近代獨逸住宅抄」も同じく『建築画報』に連載している。[26]

それまでは、日本の近代住宅のお手本として、アメリカの住宅を紹介する雑誌や書籍が多かった。大正10年（1921）より使われ始めた「文化住宅」という言葉によって括られる洋風住宅は、まさに同時代におけるアメリカの住宅に最も影響を受けている。開国した明治期には、ヨーロッパからの影響が大きかったが、まだそれは、市民の生活自体にはそれほど及んでいなかった。大正期に入り、新しい都市生活者が誕生し、同時代のアメリカ文化を大いに享受するようになった。そうした状況に住宅デザインも連動していく。そのような時勢の中で、ヨーロッパの住宅にいち早く着目した一人が蔵田であった。『近代英國田園住宅抄』は、イギリスの田園趣味の住宅を中心として、写真や平面図なども附した解説書である。その冒頭に紹介されているのがウイリアム・モリス「赤い家」である。この解説の中で、

> 「部屋のくつろぎだとか、のびやかな無装飾の壁だとか野趣を帯びた仕上げだとかいふ事は、所謂文化住宅には技巧的には取入れられてゐるかも知れませんが、どうもこれは見掛けだけのものになつて自然さを欠いてゐるやうに思はれてなりません。」[27]

と、当時、流行していた「文化住宅」を批判している。

旧米川邸の設計においては、自然に「部屋のくつろぎ」「のびやかな無装飾の壁」「野趣を帯びた仕上げ」が実現されるよう腐心し、「文化住宅」とは、一線を画する住宅デザインとなった。その後も蔵田は、海外の建築や家具の動向に注目し、機能主義、合理主義に基づいた日本人の新しい生活にふさわしい住宅の実現をめざして活動していった。

2　旧米川邸　建設の経緯

本章では、施主である米川正夫の略歴とともに、蔵田周忠への住宅設計依頼の経緯を記す。

米川正夫は、明治 24 年（1891）岡山県高梁町に生まれた。兄弟に箏曲家が多く、末妹の米川文子（1894-1995）は、生田流双調会家元で人間国宝になった人物である。少年時代よりロシア文学に親しみ、東京外国語学校ロシア語学科に入学し、級友の中村白葉（本名 長三郎　1890-1974）とロシア文学の翻訳を始めた。大正元年（1912）同校を首席で卒業。三菱の長崎支店に勤務後、旭川第七師団のロシア語教師として赴任。桑田蔦子と結婚し、大正 5 年（1916）に第七師団を辞して帰京。ロシア語小説の翻訳を手がけるようになる。翌年、大蔵省の嘱託としてロシアのペトログラード（レニングラード）に駐在。大正 7 年（1918）に帰国後、大蔵省を退官し、大正 11 年（1922）より陸軍大学校のロシア語教官となった。蔦子夫人、長男常夫、次男文男と淀橋町柏木（大久保駅の近く）の家に住んでいたが、東京外国語学校スペイン語科教授の永田寛定（1885-1973）[28] の薦めによって、大正 14 年（1925）西高井戸に土地を購入し和式の平屋を建設した。この家には、ロシアで親交を結んだボリス・ピリニャークが滞在した。[29]

大正 15（1926）年から昭和 2～3 年（1927～28）にかけて円本時代が始まった。「関東大震災で数百万巻の書が灰燼に帰したため、一種の書物餓饉の状態が生じていたので、改造社が縮刷版の形式で『日本文学全集』を、一円均一の定価で売り出したところ、これが時宜に投じて十数万の読者を獲得することができた。」[30] 新潮社も『世界文学全集』を企画し、米川正夫氏は、ツルゲーネフ『父と子』『処女地』『初恋』の三編を翻訳した。これは、第 5 回に配本された。

「この世界文学全集も改造社の全集をはるかにしのぐ成績で（中略）私はいわゆる円本成金の一人になりすましたわけである。その検印を捺すときは、印刷屋から四、五人の人が来て、私の家は印刷工場のような様相を呈し、それが二日もつづいたことを記憶している。私はそのあぶく銭の消えてしまわないうちに、宮原晃一郎の義弟にあたる建築家の蔵

田周忠氏に、設計いっさいを任せて、当時流行の分離派形式の家を記念に建てることにした。」[31]（下線、稿者）

米川氏は、同じ文学者であり旧知の宮原晃一郎のつてで、蔵田周忠に自宅の設計を頼むことにした。宮原晃一郎は、蔵田の妻婦美子の実兄である。蔵田は、大正15年（1926）駒沢村供養塚に自邸と同敷地内に宮原邸も設計している。蔵田が分離派建築会のメンバーであることも宮原から聞いていたことであろう。東京高等工芸学校の講師にも就任した建築家蔵田周忠の新しい才能に自宅の設計を任せることにしたのである。蔵田は、「建築が本当によくわかる」「理解ある施主」[32]を得た。すぐに設計案を2つ作ったが、納得がいかず、さらに時間をもらい最終案を練り上げた。計画の遅れには言及せず、待っていてくれた米川氏の態度に蔵田は心持ちが解放され自由に案を考えることができたことに感謝している。

昭和2年（1927）秋頃より、道を隔てた向かい側の土地に新たな住宅の建設が始められた。直後に米川氏は、一切を蔵田に任せて、モククワにへ向かった。

翌年に帰国すると自宅は、完成していた。新進気鋭のロシア文学者にふさわしいモダンな住宅である。米川邸の東隣が永田邸であった。「僕たち子どもは生垣の隙間から出入りして永田さんの沢山いたお子さんたちと遊んだものである。」[33] この永田家の子息大石（いわお）が哲夫氏とともに写真【図2、4】に写っている。[34]

昭和9年（1934）3月8日、ドイツを亡命し来日していた建築家ブルーノ・タウト（1880〜1938）は、帝国ホテルで、米川文子の演奏会を聴く。琴の演奏が「非常に力強くてしかも厳格」[35]であったと感動している。その10日後、兄正夫の家に招かれた。タウトは、蔵田とも知己でありその縁もあったであろう。[36] 夕食後、二階の座敷で米川兄妹が琴と尺八の合奏で「六段」と「春」を披露した。タウトとともにブブノワ女史[37]と近所に住んでいた東京外国語学校フランス語教授滝村立太郎も招かれていた。演奏後、座興としてみんなで色紙を描きあい、楽しい夕べのひと時を過ごした。[38]

蔦子夫人が病のために亡くなり、昭和11年（1936）長瀬隆と再婚した。

近所には、滝村教授の他にも、フランス文学者で劇作家・小説家岸田国士も住んでいた。隆夫人は、岸田氏らを招いてよく園遊会を開いていた。岸田の薦めによって、米川家も昭和15年（1940）群馬県北軽井沢の大学村に山荘を構えた。戦中、一家はここへ疎開している。

昭和16年（1941）陸軍大学校退官し、収入が減じるにともない、昭和19年（1944）秋、16年間を過ごした「蔵田周忠設計の分離派スタイルの家」[39]を売却することになった。幸い買い手は、すぐに見つかった。満州飛行機株式会社で、その東京支店長社宅ということになった。米川家は、西荻窪駅近くに少し古いが広めの平屋を購入し、移り住んだ。[40]

この家の新しい住人は、野田親則、澄子夫妻となった。親則氏亡き後、2020年3月現在、当主は野田澄子氏である。増改築がなされているが、よく原型がとどめられ、美しく大事に住まわれている。

3　二人のロシア人　トーリャとアレクサンドラ

米川邸には、近所の外国文学者やタウトといった外国からの客人も訪れていたが、二人のロシア人が深く関わっていたことを記しておきたい。

一人は、トーリャ。もう一人は、ロシアの文豪レフ・トルストイ（1828-1910）の末娘、アレクサンドラ・トルスタヤ（1884-1979）である。

トーリャは、ロシアの小説家ボリス・ピリニャークの甥で[41]昭和3年（1928）に米川正夫がソ連から連れ帰り、西高井戸の新居で米川家の一員として暮らすことになった人物である。米川が長男常夫と同年の子どもを引き取った経緯を以下に記したい。

昭和2年（1927）米川正夫は、西高井戸の新居の工事が始まって間もない頃、ソビエト連邦の革命10周年を記念する行事が催されるモスクワへ、小山内薫らとともに招待された。記念日の11月7日を期して行われる式典に向けて、同年10月末に東京を出発した。朝鮮、満洲経由でシベリア鉄道に乗車し、式典当日の列車がかなり遅れてしまい、夕刻のモスクワに到着した。いくつもの記念行事に列席し、各地を巡った。旧知のボリス・ピリニャークは、米川のために歓迎会を開いてくれた。[42]また、日本文学の夕べ

を主唱し、小説家宮本百合子が講演を行った。ある日、ピリニャークの家を訪問した時、次のような話をした。ピリニャークの妻の姉が最近、3人の子どもを残して亡くなった。その子ども達を引き取っているが閉口している、とのこと。やがてこの3人に会った米川は、末っ子のトーリャ（8歳）を引き取ることにした。その理由として「日ソ文化交流の一助ともなるし、長男常夫にロシヤ語を覚えさせるのに、都合が良かろう、といったような気持ちであった。」[43] とのことである。そして、妻に予告する間もなく、昭和5年（1928）1月なかばにトーリャを伴って帰国の途についた。【図15】

図15
左より米川正夫、トーリャ、ピリヤーク
米川正夫『鈍・根・才』河出書房新社、1962年

トーリカは、竣工したばかりの家で米川夫妻、長男常夫、三男哲夫とともに暮らすこととなった。日本名「享」と名付けられ、暁星中学校へ通った。青い目のため、学校でいじめられもしたが、すぐに日本語の方が達者になり、箸を上手に使い、日本の生活に馴染んでいったということが、アレクサドラ・トルスタヤの著書の中でも語られている。

トーリャは、竣工当時に撮影された米川邸の写真に写っている。【図2、4】ここには、女性と子ども3人がいる。この4人について、米川哲夫氏の証言とともに検討してみる。【図2】において女性は、お手伝いさん、アレクサンドラによると「すみちゃん」[44]、前述のように角帽の少年は永田大石、小さな男の子が3歳の哲夫氏、そして一番背の高い少年がトーリャである。人物の画像を拡大するとたしかに真ん中の少年は日本人ではない顔立ちと言える。長男常夫は、写っていないが、当時成蹊学園に通っていた。トーリャ

は、西荻窪の桃井小学校を卒業し、暁星中学校へ入学。中学２年生の時、ソ連で一緒に暮らしていたトーリャの祖母が帰国を願った。ソ連大使館からも要請があり、トーリャは祖国へ帰ることになった。戦後、昭和34年（1959）モスクワ大学に留学していた哲夫氏に25年ぶりに再会した時、40歳となったトーリャは、４人の子供の父親となっていた。[45]

米川正夫氏は、一般にはドストエフスキーの翻訳者として名高いが、トルストイの翻訳にも情熱をもって取り組んでいた。そのトルストイの末娘、アレクサンドラ・トルスタヤが、米川邸のすぐ近くに１年ほど住んでいた。ソ連にいたアレクサンドラは、海外旅行の名目と日本各地での講演依頼を受け、昭和４年（1929）秋に来日した。２年近く滞在し、昭和６年（1931）夏、アメリカへ渡りソ連からの亡命をはたした。[46]【図16】この日本滞在の記録として『回想録』[47]が執筆された。この中には、米川家との交流についても多くのページが割かれている。

まず「日本芸術」という章において、帝国ホテルで催された米川文子の琴のコンサートに招待され、深い感銘を受けたことが書かれている。[48]次に「教授の家族」では、ご近所である米川家との交流が描かれている。

米川氏がちょうど中村白葉とともに翻訳していた『トルストイ全集』が岩波書店から刊行され始めた昭和５年（1930）、アレクサンドラが米川邸の道

図16　左より米川正夫、蔦子夫人、和夫、哲夫、トルスタヤ
米川正夫『鈍・根・才』河出書房新社、1962年

を隔てた貸家に暮らしていた。40代半ばのアレクサンドラは、米川家の子どもたちを「とおるちゃん、てつちゃん、かずちゃん、りょうぶちゃん」と呼んでいた。「りょうぶちゃん」は、アレクサンドラが離日して生まれたので、実際には会ってはいない。漢字で「良夫」と書いてレフ・トルストイのレフにちなんで「りょうふ」と読むので、慈しみの気持ちをこめて、回想録に記してある。また、アレクサンドラは、「とおるちゃん」すなわち前述したトーリャの行末を心配しているが、蔦子夫人の公平な態度や家族に対する献身的な姿にも感動している。

米川氏は、アレクサドラのことを気取ったところのないさっぱりとした人物であったと記している。当時、5、6歳であった哲夫氏も「上背もあり、堂々とした恰幅」で黒っぽい服と厚いレンズの眼鏡をかけていて、自分たちを可愛がってくれたと述懐している。[49]

アレクサンドラは、「和洋折衷の大きな家で、テラスやバルコニーがあり、家の前の庭には、色取りどりの花々が植えられていた。」米川邸から「子守の気立てのよいすみちゃん」が負ぶってくる「かずちゃん（和夫）」と毎日のように片言の日本語で話しながら遊んでいた。[50]

離日後もこの一家を懐かしみ、同胞であるトーリャの行末を案じていた。故国へ戻ったトーリャのことを知ったならば、きっと安堵し、喜んだことであろう。

むすび

旧米川邸を設計した蔵田周忠は、冒頭に挙げた記事「理解ある施主と工事の失敗　―米川氏住宅に就て―」において、建築家と施主の理想的な関係について述べている。それは、施主が建築に対する理解と自らの趣味を持ち、それを了解してくれる建築家を「選択」し、そこに信頼を置けば、建築家も責任をもって設計にあたることができる、というものである。「私は最近わが米川正夫氏によつて、理解ある設計依頼者になつてもらひました。」と述べ、米川氏が蔵田が得心のいく案ができるまで待っていてくれたこと、住宅に対する機能的な要望のみで、あとは蔵田に一切を任せてくれたこと。そうした理想的な関係を米川正夫氏と築くことができたことに感謝している。

「とにかく近頃愉快に設計に従事した點で米川氏に謝意を評します。と同時に、工事が完全でなかつたことを甚だ遺憾に感じます。（中略）『材料』と『手』とを得て、設計はもつと一層研究されなければいけないことを思ひます。」と結んでいる。さらに文末に高山樗牛の一文を囲んで挙げている。

> 「藝術は生命なり、人格なり、内より發すべくして外より強ふべからず。藝術は自己の作品に對しては生母なり。（以下略）」[51]

文中「作品」は、高山にとっては作文によるもの、例えば「小説」であるが、蔵田はこれを「建築」として解釈しているのであろう。蔵田は「建築」を「藝術」の範疇にあるものと考えていた。それは、大正9年（1920）に結成された「分離派建築会」[52]に翌年より会員として参加することで、より強化された命題である。会員の一人で、蔵田を会員に推した堀口捨己は「建築は藝術でなければならないと思ひます。絵画や彫刻乃至は音楽と同じ意味で藝術であります。」[53]と主張している。蔵田は、すでに建築の実作に携わっていたが、「建築」の工学的側面だけではなく、その存在意義について深く考察する姿勢を育んでいった。

旧米川邸が竣工した昭和3年（1928）9月、分離派建築会の最後の展覧会が開催された。同年、型而工房[54]が結成され、12月に第1回室内工芸試作展が催された。翌年に竣工した石川邸[55]には、型而工房の作成した家具が初

めて実際に配置された。昭和５年（1930）に蔵田は、渡欧する。ヨーロッパ建築の体験は、さまざまな収穫をもたらした。特にドイツで短期間ではあるが、実際にジートルンク[56]に住んだことで、日本の都市における新しい住宅のアイディアを手に入れることができた。その結果の一つが帰国後に完成された等々力ジートルンク[57]である。４棟の住宅の外観は、フラット・ルーフ（陸屋根）に白壁のインターナショナル・スタイル、ドイツの建築工法をアレンジして生み出されたトロッケン・バウ（乾式工法）という新しい技術も採用されている。設計には、渡欧の経験が存分に生かされているが、蔵田と施主の関係性や蔵田の住宅設計に対する真摯な取り組みは変わらない。

戦後の混乱期にも蔵田は大学で教鞭をとりながら、人々の暮らしに寄り添った住宅設計の研究を行っていた。

大正期から昭和初期（1920～30年代）にかけて、市民社会の大転換期に伴い生活様式も変化していった。建築家たちは、それに対応する住宅設計を試行錯誤した。東京の郊外住宅地における新中産階級の住まいである旧米川邸もその一つ。よりよい生活の器としての住宅を目指して、蔵田が模索した結果である。

旧米川邸は、東京都区内において数少なくなった昭和初期の住宅であり、建築家蔵田周忠が設計した住宅の最後の１棟であることを記してこの稿を終わりたいと思う。

謝辞

本稿を書くにあたり多くの方にご協力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

特にインタビューの時間をいただきました野田澄子様、東京大学名誉教授米川哲夫先生、人見輝也、共ご夫妻、この機会を作っていただきました田島恭子先生、西村翠様、東京都市大学（旧武蔵工業大学）庭山（廣瀬）仁美さん、玉井宏典さん、城所友莉奈さん、加藤洲さんに深く御礼申し上げます。

註

1 菊地潤「分離派建築博物館　～蔵田周忠～　旧 米川邸」『美術運動史研究会ニュース』82号、2006年 http://www.sainet.or.jp/~junkk/index.htm
大川三雄、岡山理香「生き続ける建築 -11 蔵田周忠」『INAX REPORT』No.177、1月号、株式会社INAX、2009年
岡山理香「建築家 蔵田周忠の住宅　―現存する三棟を中心として」『東京都市大学共通教育センター紀要』vol.4、東京都市大学、2011年

2 〈インタビューの経緯〉
旧米川邸現当主野田澄子氏へのインタビュー：
① 2009年11月11日水曜日午後3時より、稿者は、展覧会「蔵田周忠文庫展　建築家蔵田周忠の住宅を中心として」（東京都市大学図書館、2009年11月21日～12月18日）【図17】準備のため、研究員廣瀬（庭山）仁美とともに訪問。
② 2020年2月7日金曜日午後2時より、稿者は、2020年10月より開催の展覧会「分離派建築会100年」の準備ため、勝原基貴（千葉大学）とともに訪問。
米川哲夫氏へのインタビュー：2016年10月に田島恭子氏より連絡あり。
① 2018年1月21日日曜日午後2時より、稿者は、西村翠氏とともに米川・人見邸を訪問。
米川哲夫氏、ご息女人見共氏にインタビューを行なった。
② 2018年8月16日木曜日～17日金曜日に北軽井沢の米川・人見別荘を訪問。旧米川邸にあった本棚3基の調査及び取材。稿者、東京都市大学工学部建築学科大学院2年生（当時）玉井宏典、城所友莉奈、加藤洲が参加。
③ 2019年3月29日金曜日午後2時より、稿者は、西村翠氏とともに米川・人見邸を訪問。
④ 2020年1月31日金曜日午後0時より、稿者は、西村翠氏とともに米川・人見邸を訪問。

3 「挿画　第11図～第16図　米川氏邸」『建築画報』第19巻第4号、1928年

4 蔵田周忠「理解ある施主と工事の失敗　―米川氏住宅に就て ー」『建築画報』第19巻第5号、1928年、pp.14-17

5 米川正夫『鈍・根・才』河出書房新社、1962年

6 米川哲夫「父の思い出　ー書庫・トルストイ・邦楽」日本トルストイ協会報『緑の杖』第4号、2007年

7 アレクサンドラ・トルスタヤ『お伽の国 - 日本　海を渡ったトルストイの娘』ふみ子・デイヴィス訳、群像社、2007年　稿者は論文「横井夜雨のお茶室」（『益田鈍翁と横井夜雨』小田原郷土文化館、2017年）においてアレクサンドラが小田原の横井夜雨の茶室に招かれたことを本書によって証明した。そのさいに彼女が米川正夫氏と交流があったことも知った。

8 前掲書4

9 米川正夫（37）、蔦子夫人、長男常夫（12）、三男哲夫（3）、トーリャ（12）の5人。（）内竣工当時の満年齢。次男文男は早世。その後、四男和夫、五男良夫（りょうふ）が誕生。当時、女中さんが二人いた、との哲夫氏の証言があり【図2】【図3】に写っている女性がその一人と思われる。アレクサンドラ・トルスタヤ『お伽の国 - 日本　海を渡ったトルストイの娘』では子守の「すみちゃん」との記述がある。【図6】二階平面図の客間の北側、階段横の部屋が女中部屋と思われる。（米川哲夫氏談）

10 前掲書4

11 米川哲夫氏談

12 前掲書4、p.16

13 シュローダー邸　Rietveld Schroderhuis　：1924年、ユトレヒト、設計したヘリット・トーマス・リートフェルト（1888-1964）は、オランダのグループ「デ・ステイル」のメンバー

14 バウハウスマイスタージートルンク、　デッサウ Bauhausmeistersiedlung Dessau：1925-26 年、デッサウ　設計したヴァルター・グロピウスは、バウハウス初代校長　バウハウスのマイスター（親方、先生）用住居　ヴァシリー・カンジンスキー、クレー等が居住

15 前掲書4、p.16

16 後年、パーゴラの先に花壇と煉瓦で囲った矩形の池がつくられた。広い芝生の庭に築山がつくられつつじがたくさん植えてあった。前掲書5、p.67

17 前掲書4、p.16

18 米川哲夫氏所蔵。北軽井沢の別荘にて使用されている。
【図 18】このほか同時代に制作されたと思われる棚２基もある。
19 前掲書４、p.16
20 前掲書４、p.16
21 前掲書４、p.16　蔵田にとってこの装置の設置は初めてのことのようで、シャッターの収納箱が大きすぎたことを後悔している。
22 後年、居間の東側に和室が増築されている。麻雀をするのに適した掘りごたつがあった。
23 前掲書５、p.66
24 前掲書４、p.16
25 蔵田周忠『近代英國田園住宅抄』建築画報社、1926 年、Lawrence Weaver(1876-1930) ”Small Country Houses of To-day”London,1922　を底本として抄訳、解説を加筆。早稲田大学教授佐藤功一が序文を寄せている。
「近代英國田園住宅抄」の連載は、雑誌『建築画報』第 16 巻４号、1925 年：濱岡周忠、（二）同年５号、（三）同年６号、（四）同年９号、（五）同年 11 号、（六）同年 12 号、（七）1926 年１号：蔵田周忠（濱岡より改名）、（八）同年２号、（九）同年３号、（十）同年４号
蔵田周忠「近代獨逸住宅抄（一）」『建築画報』第 17 巻６号、1926 年、～「同（十七）」第 19 巻３号、1928 年
27 前掲書 25、p.4
28 セルバンテス『ドン・キホーテ　正篇 1-3』岩波文庫、1948-51 年の翻訳者。多くのスペイン文学を翻訳し紹介した。
29 前掲書５、p.102
30 前掲書５、pp.107-108
31 前掲書 25、p.108
32 前掲書４、p.14
33 前掲書６、p.68
34 米川哲夫氏の証言を基に検証：角帽（三角帽子）は、東京師範学校付属小学校の制帽。帽子についた房は、赤は低（1～3）学年、白は高（4～6）学年。男子の制服は、紺の詰襟に半ズボン。現在、筑波大学附属小学校の制帽に受け継がれている。参照：難波知子『近代日本学校制服図録』創元社、2016 年
35 ブルーノ・タウト『日本　タウトの日記 III』篠田英雄訳、岩波書店、1957 年、p.3
36 岡山理香「東京物語　ブルーノ・タウト」『建築東京』VOL.52,NO.615、東京建築士会、2016 年
37 ブブノワ女史（ブブノワ・ヴァルヴァラ・ドミートリエヴナ　1886-1983）ロシアの画家、文学者。1922 年来日。早稲田大学文学部ロシア文学科講師などを勤める。米川氏とは旧知の仲であり、タウトの通訳もつとめた。日本におけるロシア文学のために多大なる貢献をした人物。
38 前掲書５、pp.104-106　タウトとともに来日していたエリカ・ヴィッティッヒがマッシュ・ポテトを作って御馳走してくれたとのこと。（米川哲夫氏談）
39 前掲書 35、p.6
40 前掲書５、p.164
この時、１週間ばかりを旧米川邸にて野田家と米川家が同居した。（野田澄子氏談）
41 前掲書５、p.127 に妻の亡くなった姉の３人の子どものうちの一人と記されている。
42 米川氏が初めてソビエトの作家であるボリス・アンドレヴィチ・ピリニャーク（1894-1938）に出会ったのは、彼が大正 14（1925）年にアメリカ合衆国を訪れた帰途、昭和元年（1926）3 月に日本へ立ち寄った際である。米川氏は、神楽坂の小さな喫茶店でピリニャークの歓迎会を開き、東京見物のガイドをつとめたり、講演の通訳をしているうちに意気投合し「親友づき合いになった。」（前掲書５、p.102）ピリニャークが朝日新聞と特約して、日本印象記を同紙に連載した。これは後に『日本の太陽の根』と題してソビエトで出版された。日本でも『日本印象記　ー日本の太陽の根ー』井田孝平、小野修一共訳、原始社、1928 年 ）として出版された。（980-P65 k　蔵田文庫）
ある日、正夫氏はピリニャークにかなり分厚のタイプ原稿を手渡された。題名は『消されない月の話』で、その翻訳を依頼された。この小説は、スターリン批判を基底に書かれていたため、本国では発行当日に販売禁止となっていた。米川による翻訳が昭和７年（1932）春陽堂の世界名作文庫の一巻として刊行された。同様に『北極の記録』『狼の掟』『スペランザ』などが発表された。戦後は、『機械と狼』しか翻訳がないが、戦前はこのように米川訳で紹介されていた。二度の来日を口実とし

て「日本のスパイ」という容疑をかけられ、1938 年に銃殺された。

43 前掲書 5、p.128

44 前掲書 7、p.147

45 前掲書 5、p.198

46 前掲書6、p.71　40代半ばのアレクサンドラは、メガネをかけて恰幅の良い女性で、黒っぽい服を着ていた。よく米川邸を訪ね、子どもたちと遊んだとのこと。（米川哲夫氏談）

47 岩波書店店主岩波茂雄の助言によって執筆された滞日記録。

48 前掲書 7、p.49

49 前掲書 6、p.71

50 前掲書 7、p.147

51 前掲書 4、p.17

52 分離派建築会：大正 9 年（1920）東京帝国大学建築学科の 5 人によって、過去より分離する新しい建築をめざして結成された。蔵田は「分離派建築会第 2 回展覧会」より正会員として参加。最終回となる第 7 回展まで建築図面、模型などを出品した。

53 堀口捨己「建築に對する私の感想と態度」『分離派建築會宣言と作品』岩波書店、1920 年、p.4

54 型而工房：蔵田周忠が講師であった東京高等工芸学校の卒業生（松本正雄、豊口克平ら）とともに結成したグループ。特にインテリア・デザインの向上を目指して活動した。ドイツ工作連盟、バウハウスの影響を受けている。

55 蔵田周忠「石川邸設計図」『建築画報』第 20 巻第 1 号、「松の樹に囲まれた傾斜地の住宅」『建築画報』第 20 巻第 2 号、建築画報社、1929 年

56 岡山理香「蔵田周忠文庫所蔵未発表動画資料について」『日本建築学会関東支部・研究発表会梗概集』日本建築学会、2014 年

57 岡山理香「等々力住宅区の三輪邸について」『日本建築学会関東支部研究報告集』日本建築学会、2009 年

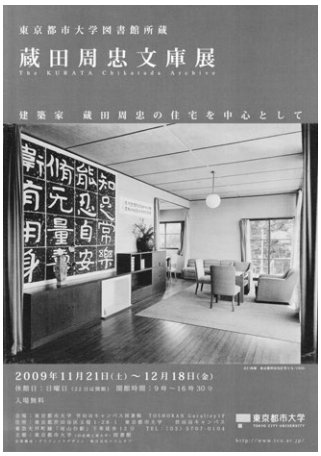

図 17
「東京都市大学図書館所蔵　蔵田周忠文庫展　建築家蔵田周忠の住宅を中心として」（東京都市大学図書館、2009 年）

図 18　旧米川邸・本棚　米川哲夫氏所蔵